

金田平一郎と九州大学附属図書館

和仁, かや
九州大学大学院法学研究院 : 准教授

梶嶋, 政司
九州大学附属図書館記録資料館 : 助教

中川, 晃一
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/1913973>

出版情報 : 2018-03-01. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :





さよなら箱崎キャンパス企画展示

1900-1949

金田平一郎と

九州大学附属図書館

平成30年

3月1日(木) - 3月26日(月)

九州大学箱崎キャンパス中央図書館 3F 回廊
(および第2情報サロン)

開館時間 平日 8:00-22:00

土日祝日 10:00-18:00 (※3月16日は休館)

主催 九州大学附属図書館・法学研究院

観覧無料

◆ギャラリートーク 於：展示会場

和仁かや(法学研究院・法史学講座)、梶嶋政司(記録資料館・九州文化史)

日時 3月10日(土) 14:30 - (参加無料・申込不要) ※30分程度

九州大学附属図書館利用支援課

〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号

TEL:092-642-2533 e-mail:tousiryou@jimu.kyushu-u.ac.jp



「金田平一郎(1900-1949)と九州大学附属図書館」

金田平一郎博士は、九州帝国大学法文学部法制史講座の担当教授として、とりわけ江戸時代の民事法制度に関する数々の先駆的な業績を残しました。昭和3(1928)年末に九大に着任して以来、第二次世界大戦を挟んだ20年あまりの間、博士は膨大な歴史資料や文献を蒐集して大学の蔵書形成に大きく貢献し、法制史学における地域研究の基礎をも築きました。大学所蔵の文書群としてもユニークな九州大学附属図書館付設記録資料館の法制資料部門・九州文化史資料部門は、まさにこの所産です。戦後は第13代目の附属図書館長として、新制大学下の図書館の基礎造りに尽力しましたが、在職中に途半ばで亡くなりました。

昨年、博士没後に本学に収められた1000点以上に及ぶ旧蔵書や古文書が、「金田文庫」として文庫化されました。またご遺族からは、博士の日記や交流のあった著名な学者たちからの書簡、さらに福岡日日新聞(西日本新聞の前身)等への寄稿を自らまとめたスクラップブック、などをご寄贈いただきました。これらによって、これまで充分に知られていなかった博士の研究活動の実際はもとより、拠点となった激動期の九州帝国大学とそれを取り巻く福岡や箱崎の様子が、新たな側面から明らかになりつつあります。

本展示は、この「金田文庫」を紹介するはじめての試みです。いよいよ閉館を迎える箱崎の中央図書館において、研究・教育を支える図書館のあるべき未来を見据えていた金田博士を顕彰し、ここ箱崎の地で培われた法文学部の学問伝統とそれを支えてきた図書館の歴史を振り返るとともに、時代は変わっても変わらない図書館の使命とは何かを省察するよすがにしたいと思います。多くの方々に、箱崎に刻まれた知的営為の歴史を感じていただければ幸いです。

本展示の開催にあたり、貴重なお品をご寄贈下さいました金田博士のご長男金田久仁彦様、ご次男金田史麻呂様に、心より篤くお礼申し上げます。

監修

法学研究院 法史学講座 准教授 和仁かや
記録資料館 九州文化史資料部門 助教 梶嶋政司
人文科学府 歴史空間論専攻 博士後期課程 中川晃一

デザイン協力：川邊あさひ(人文科学府歴史空間論専攻修士課程)

金田平一郎（1900-1949）関係略年表

年	月日	出来事
明治33（1900）年	7月10日	茨城県玉造町（現・行方市）で生まれる
明治44（1911）年	1月	九州帝国大学 創設
大正 6（1917）年	3月	東京上野の私立京北中学校を卒業する
大正 7（1918）年	5月	福岡県立図書館 開館
大正10（1921）年	3月	仙台の第二高等学校(一部乙組独法文科)を卒業する
	11月	福岡高等学校（旧・九州大学教養部の前身） 創設
大正11（1922）年	5月	九州帝国大学附属図書館 創設
	9月	法文学部用地として福岡県糟屋郡箱崎町民有地を購入完了
大正13（1924）年	4月	九州鉄道の福岡・久留米間開業（現・西鉄天神大牟田線）
	9月	法文学部 創設（初代法文学部長は美濃部達吉）
大正14（1925）年	4月	法文学部第1回入学式を挙行、授業開始
		治安維持法公布
	5月	法文学部に法制史講座 設置（初代担当者は瀧川政次郎）
	6月	箱崎地区に附属図書館及び書庫が竣工（現在の保存図書館）
大正15（1926）年	3月	東京帝国大学法学部法律学科(独逸法選修)を卒業する
		法文学部本館完成
	4月	東京帝国大学大学院に入学する
昭和 2（1927）年	3月	金融恐慌勃発
	4月	私立法政大学の羅馬法講座を嘱託で担当する
	10月	法文学部内訌事件を福岡日日新聞が報道、瀧川教授を含む法文学部5教授、1助教授休職
昭和 3（1928）年	3月	共産党員大検挙（三・一五事件）、法文学部3教授辞職
	11月19日	九州帝国大学法文学部講師を嘱託され、日本法制史を担当する
昭和 5（1930）年	2月10日	九州帝国大学法文学部助教授に就任し、法制史講座を担当する
	3月	福岡高等学校に歴史地理資料室「玉泉館」開設
昭和 6（1931）年	3月	『法政研究』第1巻第1号発行
	9月	満州事変
昭和 7（1932）年	5月	五・一五事件
昭和 9（1934）年	9月	九州文化史研究所 設置
昭和11（1936）年	2月	二・二六事件
昭和12（1937）年	7月	日中戦争勃発
昭和13（1938）年	4月	国家総動員法公布

金田平一郎（1900-1949）関係略年表

年	月日	出来事
昭和14（1939）年	9月	第二次世界大戦勃発
昭和15（1940）年	5月 4日	九州帝国大学法文学部教授に就任し、法制史講座担任となる
	12月	箱崎町と福岡市が合併、九州帝国大学の所在地が福岡市になる
昭和16（1941）年	12月	太平洋戦争勃発
昭和18（1943）年	10月	学生の徴兵猶予停止、法文学部学生を中心とする学徒出陣のため全学壮行会を举行
昭和19（1944）年	6月	附属図書館商議委員会で図書の学外疎開決定
昭和20（1945）年	6月	福岡大空襲
	8月	太平洋戦争終結
昭和22（1947）年	10月	九州帝国大学が九州大学に改称 図書館も九州大学附属図書館と改称
昭和23（1948）年	6月15日	九州大学附属図書館長となる
昭和24（1949）年	4月	法文学部 廃止 法学部、経済学部、文学部 設置
	5月	新制九州大学が設置される
	6月30日	学位論文「近世民事責任法ノ研究」により、法学博士（九州大学）授与
	10月 7日	闘病の末、在任中に九州大学医学部附属病院で逝去する
昭和26（1951）年	3月	蔵書の一部を九州大学法学部が購入
平成29（2017）年	7月	上記蔵書の文庫化が決定（金田文庫）

<凡例>

- 黒・・・金田平一郎に関する事柄
- 赤・・・附属図書館に関する事柄
- 紺・・・法文学部に関する事柄
- 紫・・・九州大学に関する事柄
- 緑・・・時事、社会情勢

金田平一郎 主要著作

刊行年	著書/論文
	<著書>
昭和23（1948）年	『近世債権法』（司法資料第298号、法務庁資料統計局資料課）
	<論文>
昭和2（1927）年	「徳川時代に於ける雇傭法の研究（1～4・完）」『国家学会雑誌』41巻7～10号
昭和3（1928）年	「徳川時代に於ける訴訟上の和解（1～2・完）」『史苑(立教大学史学会)』1巻2、3号 「徳川時代の特別民事訴訟法—金公事の研究—（1～4・完）」『国家学会雑誌』42巻11号、43巻2、7、9号（昭和3～4年）
昭和6（1931）年	「徳川時代に於ける債権及び債務の移転」『法政研究』1巻1号
昭和7（1932）年	「近世に於ける九州地方の法制関係語について」『九大国文学』3号 「古判例集数種」『法政研究』2巻2号 「我近世法上の「仲ヶ間事」（1～2・完）」『国家学会雑誌』46巻4、5号 「古判例研究—判例を中心とせる古法制雑考（その1）—」『法政研究』3巻1号
昭和8（1933）年	「徳川時代の他人の行為に対する責任制一斑」『国家学会雑誌』47巻11号
昭和9（1934）年	「徳川時代に於ける不作為の給付契約・詫証文・徳政担保文言附証文—史料紹介を主眼とする古法制雑考（その2）—」『法政研究』4巻2号 「徳川時代の大坂分散法註解」『国家学会雑誌』48巻9号 「公事方御定書の損害賠償法規に就いて」『法政研究』5巻1号
昭和10（1935）年	「竈雑考—古法制雑考（その3）—」『法政研究』6巻1号
昭和12（1937）年	「大坂奉行所刑事判決例十六題—近世中葉大坂地方に行はれたる刑事的法則(1)—」『法政研究』7巻1号（以下昭和14年まで全4回連載） 「判例近世大坂私法一斑—大坂奉行所判決例四十五題紹介—」石井良助編『中田先生 還暦 祝賀法制史論集』（岩波書店） 「徳川幕府『過料』刑小考」国家学会編『国家学会五十周年記念 国家学論集』（有斐閣） 「近世懲役刑小考—熊本藩刑法研究序章—」『九州帝国大学法文学部十周年記念 法学論文集』（岩波書店）
昭和14（1939）年	「対馬藩刑事判決例五十題—近世中葉対馬藩に行はれたる刑事的法則—」『法政研究』10巻1号
昭和16（1941）年	「小城藩刑事判決例六十二題—近世中葉小城藩に行はれたる刑事的法則—」『法政研究』11巻1号
昭和17（1942）年	「徳川時代の大坂町制一斑」『法政研究』12巻1号 「熊本藩「刑法草書」考」『法政研究』12巻2号頁
昭和18（1943）年	「九州地方の近世刑事判決録」『法政研究』13巻1号 「対馬藩の奴刑」『法政研究』13巻2号
昭和21（1946）年	「近世の私的差押契約」『法政研究』14巻3・4号
昭和22（1947）年	「古法制雑記(1)」『法政研究』15巻1・2合併号（以下翌年まで全2回）
昭和25（1950）年	「明治前半期の民事責任法」『法政研究』17巻合併号（九州大学法学部独立記念） 「福岡の法制史」福岡編纂委員会『福岡』（福岡市役所）

1900～1928

生い立ち

金田平一郎は明治 33（1900）年 7 月 10 日、茨城県玉造町（現・行方市）で生まれました。幼くして生母と死別した金田は、祖父より論語などを厳しくたたき込まれ、それが学問上の基礎となったと後に回想しています。教育熱心な祖父の意向を受け、中学からは東京へ出て、郷里から汽車で最も近い上野にあった京北中学校（現・東洋大学京北中学高等学校）に通った後、奇しくも師と仰ぐこととなる中田薫（1877-1967）の母校でもある仙台の旧制第二高等学校に入学しました。この時に詩人としても著名な土井晩翠（1871-1952）らからドイツ語の教育も受けています。

学問の道～九州へ

東京帝国大学に進んだ金田は、上杉慎吉（憲法）・鳩山秀夫（民法）らの教授陣の講義を受け、大正 15（1926）年に同法学部法律学科を卒業しました。当初は法曹を志望していたようですが、結局大学院で日本法制史を専攻する道を選びました。法制史研究への志は、中田の著書『徳川時代の文学と私法』を学部学生時代から大切にしていたこと、また法制史科目の受講にきわめて熱心であった様子からも窺えます。

大学院での研鑽は、昭和 2（1927）年に、最初の著作であり、後に法制史はもとより経済史学にも大きな影響を与えた先駆的な論文「徳川時代に於ける雇用法の研究」となって結実しました。ここから関心を江戸期の債権法制全般に広げていた折、翌昭和 3 年 11 月に発令を受け、九州帝国大学法文学部に講師として赴任することとなりました。日記には、新天地



での活動に期待を膨らませる若き日の金田が、当時の博多の情景とともに生き生きと描かれています。

昭和初期の天神周辺。中央が当時の福岡駅（西日本新聞社提供）

1929～1933

九大法文学部内訌事件

希望に満ちて九州の地に初めてやってきた金田を待っていたのはしかし、大正 13（1924）年の創設から間もない法文学部で起きた内紛と、その余波を受けての不安定な身分でした。この事件には、当時東京帝大法文学部長となっていた中田も関わっており、また何より中田門下で金田の兄弟子かつ講座の先任であった瀧川政次郎（1897-1992）が中田の意向もあってか休職を命ぜられ、その復職問題が燻っていたこともあって、あくまでも「講座担任者」としてではなく単に「講義補充」のためとの条件で漸く採用に至っています。教授会の出席もかなわぬまま講義準備や研究に臨まねばならない不安との闘いは日記にも綴られています。

晴れて法制史講座に就任

結局瀧川の復職問題は頓挫して退職に至ったため、昭和 5（1930）年 2 月に正式に法制史担当講座の助教授に任ぜられた金田は、漸く九州帝大での活動を本格化させることとなります。この時点で既に九大には、洋の東西を問わない旺盛な蔵書蒐集活動により、法制史に関する様々な重要史料も蓄積されつつありました。近世大坂の史料を始めとするこれらの素材は、助教授着任間もない時期の著作に活かされており、後に金田の主要な研究テーマとなる債権法研究の骨格をつくり上げていきました。同時に、とりわけ幕府法制に関する史料を中心として写本の蒐集にも早々に取り組み、入手した重要文書の情報交換などを通じて、さらなる蔵書の充実を図っていた様子も窺えます。



九州への定着と研究の広がり

他方で、九州に根ざそうとする多彩な活動も、早くから見られます。たとえば、このたびご寄贈いただいたスクラップブックより初めて明らかになったことですが、戦前戦中に多く寄稿している福岡日日新聞（西日本新聞の前身）紙上などでは、しばしば様々なペンネームを用いて、福岡の人々に法制史の話題、もしくは法制史家から見た福岡の様子を語るような小説ないし随筆風読み物を数多く連載しています。日記にも法制史の研究における随筆の重要性について記すなど予てから文学への造詣や関心が深かったところに、法文学部ならではの隣接分野との近しさが花開いた一例といえるでしょう。昭和 7、8 年頃には、既に大学に収められていた九州地域の史料を素材とした論文も書き始め、独自に調査なども開始しています。赴任前までは関東で暮らしていた金田にとって、身分的にも漸く安定を得られた中で目に入ってきた新天地九州の風景や歴史は、とても新鮮かつ魅力的だったのかもしれません。



九州帝国大学法文学部（昭和 3 年頃）



九州帝国大学附属図書館（昭和 3 年頃）

(B)

家族づれのお歩い

九大法文科の金田助教授



一方、このとき金田は 34 歳、経済史の遠藤正男（1901-1940）は講師になりたての 33 歳でした。ともに将来を嘱望される若手研究者と言えます。そして、若き彼らが早い段階で研究対象として注目していたのが豊後日田でした。文化史発足の前後、金田と遠藤はそれぞれの学問上の問題関心から度々日田を訪れています。



日田市内にて
(昭和16年5月)

史料蒐集の推進と成果

九州地方の近世史料を主たる対象とした文化史は発足当初、福岡藩の税法、「日田金」と九州諸藩の財政政策、石炭鉱業の発展、切支丹史料とくに宗門帳の4つをテーマに掲げました。

これをうけて金田の採訪は九州全域の主要な史料に広がっていきます（「金田平一郎の史料採訪」および「金田平一郎の史料採訪マップ」参照）。そして、対馬の奴婢制の発見など、文化史における活動の成果が徐々に著作にも反映されていくことになります。

昭和19年には、金田や経済史の宮本又次（1907-1991）を含む文化史に対して文部省から科学研究費が交付され、それをも受けてのことか、金田が九州各地の裁判所に残る歴史資料を精力的に調査していることも見逃せません。

戦時下の活動

昭和10年代末には戦争の影響は顕著に大学にも及び、史料蒐集の良き協力者であった学生たちはもとより、文化史からも若い助手たちが招集されて戦地に赴きました。残された教官たちも、当時の文部省からの意向を受けて編成された「報国隊」に組み入れられ、板付空港（現・福岡空港）の建設を始めとする勤労奉仕への従事を余儀なくされます。しかしながら、かかる困難な状況にもかかわらず、史料に刻印された受入記録などからも判明するように、旺盛な蒐集活動は変わることなく続き、その結果、福岡市内を始め九州各地の空襲により失われた史料の多くが、辛くもその惨禍を免れた箱崎に残って後世に伝わることとなりました。

金田平一郎の史料採訪（確認できたもののみ記載）

年	月日	行き先
昭和 8 年	11 月 23 日	日田千原家
昭和 9 年	3 月	日田広瀬家
	9 月 13 日	豊津小笠原別邸
	10 月 10 日	豊津小笠原別邸・豊津中学
	10 月 11 日	中津小幡記念図書館・中津中学校ほか
昭和 10 年	4 月 13 日	佐賀鍋島家
昭和 12 年秋		熊本県庁・細川家別邸・熊本城址保存会・熊本図書館
昭和 13 年	3 月 23 日	人吉
	3 月 25 ～ 26 日	宮崎県立図書館・延岡内藤家
	11 月 26 日	久留米
昭和 14 年	3 月 22 ～ 24 日	鹿島鍋島家・諫早家・大村家・武雄鍋島家・武雄中学
	9 月 3 ～ 5 日	大村家・長崎県庁・長崎県教育会館・長崎図書館・小城鍋島家ほか・多久聖堂附属図書館ほか
	9 月 6 日	唐津中学ほか
	10 月 30 日	小城鍋島家
昭和 15 年	2 月 17 日	小城鍋島家
	3 月 14 ～ 17 日	島原第一小学校・島原松平家・神代鍋島家・神代小学校・平戸松浦家・沖図書館・沖記念館・武雄
	9 月 15 日	糸島郡前原町
昭和 16 年	3 月 11 日	臼杵中学校・臼杵図書館・稲葉家別邸
	3 月 12 日	大分高女・大分県庁・大分図書館・竹田町
	3 月 13 ～ 15 日	細川家
	11 月 16 日	熊本県立図書館
	11 月 17 日	大分県立図書館・大分県庁・大分県立第一高女
	11 月 18 日	豊後森町
昭和 17 年	12 月 2 ～ 4 日	熊本県庁・八代松井家
	12 月 21・22 日	熊本県庁・佐賀鍋島家
昭和 18 年	3 月 30・31 日	鹿児島県立図書館・集成館・鹿児島市役所・玉里島津家別邸
	10 月 11 ～ 13 日	杵築・大分市・大分県立図書館
	12 月 26 日	糟屋郡青柳村
昭和 19 年	2 月 5 日	佐賀地方裁判所
	2 月 9・10 日	伊万里裁判所・長崎控訴院・検事局
	2 月 20 日	熊本地方裁判所
	3 月 31 日	都城島津家
	4 月 1 日	八代区裁判所
	9 月 28 ～ 30 日	出水町役場・鹿児島地方裁判所・鹿児島県庁・鹿児島県立図書館
	10 月 1 日	人吉
昭和 20 年	2 月 22 日	呼子町役場・小川嶋捕鯨会社
	2 月 24 日	佐賀鍋島家
昭和 22 年	8 月 13 日	秋月黒田家
	9 月 25・26 日	長崎図書館・平戸

金田平一郎の史料採訪マップ



福岡藩関係史料収蔵機関の焼失

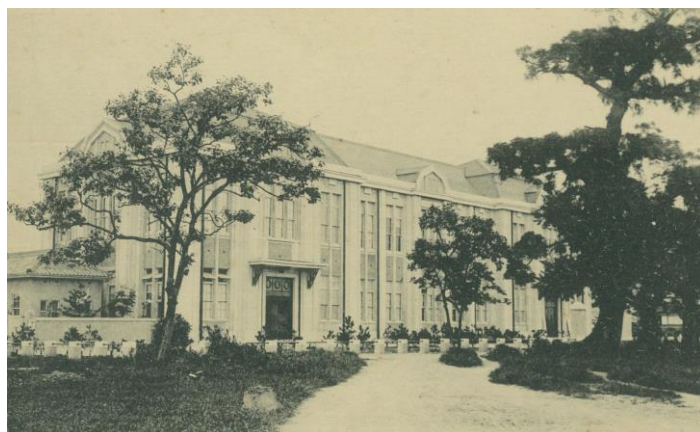
福岡藩の記録・文書類は、廃藩後も黒田家に管理され、維新後の黒田家の東京移住に伴い、多くは東京の黒田邸に移され、地元福岡には、浜の町の黒田家別邸の武具櫓（福岡城から移築）に保管され、その一部は、福岡藩祖黒田孝高・長政を祀る西公園の光雲神社に収蔵されていました。大正7年には福岡県立図書館が天神2丁目に落成・開館し、初代図書館長として郷土史家伊東尾四郎が就任し、貴重な郷土史料が大量に蒐集されました。



黒田家別邸（西日本新聞社提供）



光雲神社



福岡県立図書館

昭和20年6月19日の福岡大空襲により、黒田家別邸、光雲神社、福岡県立図書館が焼失し、福岡に残っていた福岡藩関係史料は壊滅的被害を受けました。東京赤坂の黒田邸でも、什宝類を納めた六棟の蔵のうち、最重要品のみを集めた一号蔵以外は全焼しました。

福岡藩関係史料の多くが失われた中で、戦前・戦中期に九州帝国大学において蒐集されていた膨大な史料群は戦災を免れ、今日では極めて貴重なものとなっています。

1945～1949



福岡大空襲で焼け野原になった福岡市街地（西日本新聞社提供）

敗戦からの復興

昭和 20（1945）年夏の敗戦後、箱崎のキャンパスには徐々に復員学生たちや教職員、そして疎開させていた書籍類が戻り、大学も図書館も再出発に向けて少しずつ動き出しました。混乱の中にあっても、金田は学術論文のみならず九州地域の様々な媒体に寄稿をしており、これまでの活動を通じて九州に確固たるネットワークを築き、史料蒐集と同時に発信も積極的に行っていた様子が窺えます。

附属図書館長就任

昭和 23 年 6 月、金田は第 13 代附属図書館長に就任しました。無事に残った附属図書館に期待される役割は大きく、学外利用者への開放を積極的に行うとともに、戦後の混乱状況への対応も重要な課題でした。これまでの図書館長が法文学部からの持ち回りで形式的な関与に止まる傾向にあった中、日記には館長自ら実質的な対応に乗り出し四苦八苦する様子が表れています。同時に戦時中より執筆していた『近世債権法』の完成、また同年より開始された文部省による全国的な近世庶民史料調査でも、その専門及び立場上から九州地域における主導的な役割を期待されるなど多忙を極めていました。

戦後附属図書館の課題

①本なし

創設以来、「貧弱極る図書館の内容 書籍は図書館よりも研究室に多い」(『九大新聞』昭和2年10月10日)といわれた附属図書館の状況は、戦後でも問題となっており、学生の自治委員会からの批判に金田が対応しています。

②人なし

当時の入館手続は学生証や閲覧票を受付に提出して図書閲覧証書と引換えて閲覧室に入室することになっていましたが、戦中人手不足により受付を廃止したことで図書や備品の盗難が頻発しました。

③金なし

蔵書を充実させ、受付を復活させるためには、各学部より図書購入費と人件費を獲得しなければなりません。それに加え、熊本の古書店より売りに出された宇土細川家の旧蔵書(細川文庫)が、各大学間での激しい争奪戦の末、九州大学に収まることになり、そのために30万円(現在の数千万円)もの大金を捻出せねばならず、大学会計課と交渉することになります。

こうした課題山積の附属図書館の館長として金田は奔走しました。



附属図書館裏側(昭和24年以下同)



長澤由次郎司書官



附属図書館出納台



附属図書館事務室

早すぎた死

重要な仕事を重ねる一方、過労は金田の身体を徐々に蝕み、この年の9月に北海道大学での国立総合大学附属図書館協議会に向かう途上、東京・上野駅で倒れてしまいます。しばし郷里で静養した後10月には福岡での職務に復帰し、アメリカからの視察団等へも図書館長として対応していますが、年末には自宅療養、翌昭和24（1949）年春には九州大学附属病院への入院を余儀なくされました。江戸・大坂・九州それぞれ異なる三地域の比較法制史研究を構想していた金田は、学位論文「近世民事責任法の研究」や「福岡の法制史」の執筆に着手するなど、健康を害する中で最後まで精力的な研究活動を行いました。病床でも、混乱の続く図書館、そして同年4月の法文学部の分離独立を控え、法文学部ならではの分野横断的な学問拠点として自ら育んできた文化史の将来を案じていたものの、この年の猛暑にも苦しめられ、10月7日に心臓弁膜症で亡くなりました。享年49歳、法制史学会の創立総会に先立つこと凡そ1か月半前の、図書館・文化史にとっても、学界にとっても途半ばの些か早すぎた死でした。



おわりに

九州地域の歴史的意義や、法文学部という、いわゆる「後発」の帝国大学であったからこそ実現したともいえる分野横断的な環境、そしてそれらの結実としての独自の学問拠点たることを望み続けた文化史—九州・箱崎における金田は激動の時代において、自らの置かれた環境の特性を正確に理解し、最大限活用していました。蔵書形成と有機的に連動したきわめて意欲的かつ先端的な学問研究は、まさにここ箱崎で培われた九州帝国大学法文学部の学問伝統の、最良の側面のひとつといえます。

「金田平一郎と九州大学附属図書館」展出品目録

会期：2018年3月1日～3月26日

於：九州大学（箱崎地区）中央図書館

	No.	展示物	年代	所蔵
展示ケース 1	1	通信簿（中学）	大正2～6年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	2	成績表（大学）	大正10～15年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	3	西洋法制史講義ノート（中田薫博士講述）2点	大正年間	金田文庫（追加ご寄贈分）
	4	日本法制史講義ノート（中田薫博士講述）	大正年間	金田文庫（追加ご寄贈分）
	5	中田薫『徳川時代の文学と私法』初版本	大正13年	金田文庫
	6	「徳川時代に於ける雇傭法の研究（一）」（『国家学会雑誌』41巻7号）	昭和2年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	7	三浦周行書簡	昭和3年5月17日	金田文庫（追加ご寄贈分）
展示ケース 2	8	辞令（九州帝大講師）	昭和3年11月19日	金田文庫（追加ご寄贈分）
	9	昭和四年日誌	昭和4年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	10	高柳真三書簡	昭和4年2月5日	金田文庫（追加ご寄贈分）
	11	中田薫書簡	昭和5年1月15日	金田文庫（追加ご寄贈分）
	12	法文学部授業時間割	昭和6年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	13	法文学部教室並演習室位置略図	昭和6年	金田文庫（追加ご寄贈分）
展示ケース 3	14	諸吟味窺書之写（大坂・八田家文書）	天明5（1785）年	法制資料
	15	諸届出願出法式 3冊（大坂）		法制資料
	16	新正御評定所御載許御留書 2冊		法制資料
	17	「古判例集数種」（『法政研究』2巻2号抜刷）	昭和7年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	18	『日本随筆大成』巻十二	昭和4年	金田文庫
	19	金田平一郎雑文集	昭和4～23年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	20	博多古門戸町文書		金田文庫（追加ご寄贈分）
	21	誤書物之事（鞍手・古野家文書）	弘化2（1845）年11月	金田文庫
展示ケース 4	22	日田千原家文書筆録	昭和8年11月23日	金田文庫（追加ご寄贈分）
	23	譲渡申山證文之事（日田文書）	享和3（1803）年12月	金田文庫
	24	高取悦堂『廣瀬旭狂先生小傳』	大正13年	金田文庫
	25	大蔵永常『民家文章早引大成』	文政11（1828）年	金田文庫
	26	私下人永代二壳渡申男書物之事（永代身壳証文）	正保4（1647）年2月11日	秀村選三
展示ケース 5	27	九州文化史研究所探訪日記	昭和9年	九州文化史
	28	蔵牆集（対馬・宗家文庫本謄写）	昭和11年2月	九州文化史
	29	対馬・宗家文庫借用目録（文化史関係起案書綴）	昭和10年	九州文化史
	30	「対馬藩刑事判決例五十題」（『法政研究』10巻1号抜刷）	昭和14年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	31	科人帳（対馬・宗家文庫本謄写）	昭和11年	九州文化史
	32	郡方罰帳（佐賀・小城鍋島家文庫本謄写）	昭和15年	九州文化史
	33	手限口書（長崎県立図書館本謄写）	昭和12年	九州文化史
	34	賛生館御沙汰書写		法制資料
展示ケース 6	35	黒田家別邸御記録目録	戦後	附属図書館（中央）
	36	御参勤海陸日記（浜ノ町別邸黒田家文書本謄写）	昭和9年	九州文化史
	37	昭和20年6月19日付帯出票	昭和20年6月19日	金田文庫（追加ご寄贈分）
	38	「日本女権史話」（大分県婦人連合会『婦人文化』第1～16号）	昭和23年6～12月	金田文庫（追加ご寄贈分）
	39	「九州と監獄法」（『九州行刑』3巻3号）	昭和23年12月	金田文庫（追加ご寄贈分）
	40	『近世債権法』（司法資料第298号）	昭和23年10月	金田文庫（追加ご寄贈分）
	41	名刺	昭和24年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	42	昭和二十三年日誌	昭和23年	金田文庫（追加ご寄贈分）
	43	長澤司書官の弔辞	昭和24年10月10日	金田文庫（追加ご寄贈分）